

和紙だより

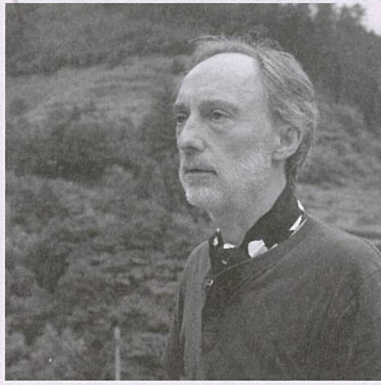
■目次

越前和紙への提言「ロギール・アウテンボーガルトさん 取組紹介と紙と墨色」 レポート 第十七回越前千年紀ロマン講座	4
情報欄	3
	2
	1
	頁

越前和紙への提言

■ロギール・アウテンボーガルト

1955年、オランダ・ハーグ生まれ。1980年、来日し、日本各地の手漉き和紙工房を訪ね歩く。1981～1992年、高知県旧伊野町にて紙漉き修行、自給自足生活を体験しながら、楮も栽培。1992年、四国のチベットと呼ばれる榑原町に移住し、紙漉き工房「てんぐの風」を開設。2006年、紙漉き体験民宿「かみこや」をオープン。土と原料にこだわった紙漉き、自然や文化を通して、地域の個性を活かす和紙づくりと様々な活動を行っている。1996年「高知県新田舎デザイン賞」受賞、2004年「高知県文化環境功労者賞」受賞、2005年「森の名手・名人100人」に認定(国土緑化推進機構)、2007年、「土佐の匠」に認定(高知県)。



■ロギール・アウテンボーガルトさん
(紙漉き民宿「かみこや」主宰)
「ペーパー・ツーリズムで引き出す地域の個性」

●自然志向が和紙と繋がる

アムステルダムでは、夜は美術大学に通いながら、昼間は製本工房で働いたので、紙と触れ合う機会は多かつたと思います。ある時、美しい紙に出会いました。黄色がかつた雲竜紙系の民芸紙で、製本用の厚手の紙でしたが、透明感がありました。誰かが多分日本の紙では？と言ったので、まずは本屋を回って調べ始めました。ダード・ハンターの例の有名な本「A paper-making pilgrimage to Japan, Korea and China」は手に入り、「日本は最もいい紙を漉く」と書いてあった。七十年代後半、オランダでは菜食やマクロバイオティクが流行っていて私も玄米食でしたし、日本の自然農法にも興味がありました。また、たまたま開催されていた日本映画フェスティバルで、黒沢明の映画を見て、行ってみようかと思った。この間三〜四ヶ月。多分大都会の中での暮らしに疑問も始めていたのだと思います。

一九八〇年に来日。東京の観光案内所みたいな所に行つて「日本の紙漉きが見たい」と言つたら、全国の和紙産地の英語のリストを作つてくれました。本屋さんで、ティモシー・ベレットの「Japanese Papermaking」(1983)と「和紙―風土・歴史・技法」(講談社刊 1981)を見つけ、リストと本を頼りに、越前、小川、王子の紙の博物館、京都、鳥取、島根、高知、宮崎、沖繩等の産地を訪ね歩いた。

伊野の高知県紙産業技術センターは全国でも

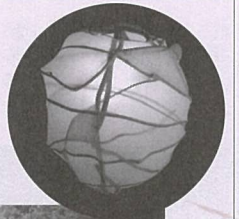


榑原の住民の方と昔の知恵を探る

トップと聞いていたので、もう一度高知に戻り勉強させてくれないかと頼んだ。当時の先生は大川昭典さんでした。沖繩の芭蕉紙を復元した勝さんにもお会いしましたが「そんなに勉強したかつたら、まあ原料でも植えなさい」と言われた。元々有機農業に興味があつたから、長野、和歌山など全国を探したが、最終的にいい原料といい水がある四万十川源流のここ榑原(ゆすはら)を拠点に決めました。伊野と土佐市では足かけ十二年紙修行をしました。

●土地の個性を受け入れた紙づくり

榑原は冬は五〇〜七〇cmの雪も積り、高知の中でも一番寒い所です。昔は、山口、岡山と並んで紙幣用の三椏の大産地なので、受け継がれた製法や原料の栽培法なども、まだ村のお年寄りから聞くことができる。この「かみこや」を開いた時も、かろうじて残っていた土地原産の楮と、あちこちから持ってきた苗で種類を増やしていきました。大体四年目から使えるようになった。周辺はカルスト地形で、小川の水はややアルカリ性が強いが、「かみこや」の水はpH7のやや硬水です。いわゆる「産地」というものができる前は、どこでも作り、百年前も紙漉きやっていたわけです。ですから、水や土も含めて、この土地の個性を受け入れて紙を漉きたいと思います。ネリは基本的にはトロロアオイを栽培していますが、ここは標高が高いのでノリウツギもあるし、アオギリも使えます。



▲森の息吹のする照明器具
▲かみこや全景



和紙作り体験ワークショップの様相

八十九年に初めて個展をやつた後、照明器具などの注文も増えましたが、景気低迷で余り売れなくなつた。幸いなことに妻は料理が得意で、自然に根ざした紙漉きと和紙の文化、持続可能な暮らし方を伝えるためにも、体験型の民宿をやろうと思ひ立つたのです。インターネットのお陰で最近紙も作品も売りやすくなつた。外国から勉強に来る人もある。グリーンツーリズムを起こしたい行政の方や、地方経済などを勉強している学生さんたちも結構、視察にみえます。夏場はコットンペーパー制作や原料栽培、冬場は伝統和紙の紙漉きと決めています。

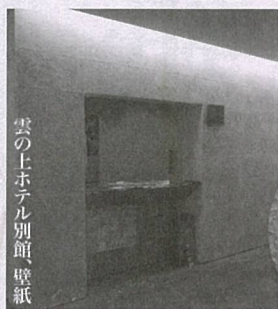
●植物学アプローチ

高知県は、植物学的にも貴重な土地で、国内に自生する植物六千種のうち、その半数以上約三十七種があるそうです。植物と共に学んだ知恵を分かち合い、新たな生き方を模索しようとする潮流があり、この考えを提唱している高知工科大学の渡邊高志先生と和紙の原料や栽培法などについて研究を始めました。



豊かな植物環境への気づきを意図して渡邊先生らと制作したガイドブック

現在、楮だけでも六種類栽培していて、それを昔ながらに全部分けて収穫します。英語では companion plants (植え合わせ) といいますが、三極と麦と一緒に植えるなどの昔から知られている栽培技術も実践しています。種類の違った楮で紙を漉いて、柔らかさ、繊維の長さ、風合いなどをデータに取り、用途に応じて紙を漉く。それが日本の本来の和紙の文化でした。高知はかつて紙原料の宝庫でしたので、和紙に関する植物のことなら、何でも任せておけというような、知識の蓄積ができたら、それがこの土地の「売り」にも繋がる。そうすれば、地域の特長が引き出せ、持続可能な暮らしにも貢献できます。考え出すと、日本の紙は可能性がありすぎて困ってしまいます。(笑)



雲の上ホテル別館、壁紙

■講演「日野楠雄 「和紙と墨色 紙・墨・水、三位一体の世界」

文化財の拓本や書道関係の出版物発行などを手掛ける(有)東京文物の日野楠雄さん(文房四宝研究家・和紙文化研究会会員)は、近年の手漉き和紙工房の著しい減少にも心を痛めてきた一人でもある。かな書道に和紙はよく使われるが、漢字書道には余り使われないことに疑問を抱いてきた日野さんは、ここ五、六年、書に向いていないといわれる和紙も紙・墨・水の三位一体の使い、方次第で、魅力的な書表現が可能なのではないかと研究を続けてきた。

その研究の一端が、去る九月七日、大正大学(東京都豊島区)書道カレッジの「スペシャルセミナー」で、発表された。会場には、書にまつわる道具や材料、多くの実験を示す和紙なども展示され、書道愛好者をはじめ、和紙関係者など約八十名が講演に聴き入った。

●墨とは何か？

六一〇年曇徴が伝えたと言われる墨は、奈良時代には既に国産化していたらしく、基本的製法を変えることなく、私達は二三〇〇年墨を使ってきた歴史を有する。墨の原料は油や松を燃やした際に出る煤(すす)と動物のタンパク質コラーゲンから抽出される膠である。墨は、地球上最も安定した物質である炭素と、一瞬にして変化する不安定物質の膠が水を媒介として結合している不思議なものだという。永年研究されているにも拘わらず、分析結果を書や水墨画に応用し、同じ墨色や滲みを出そうとしてもなかなかうまくいかない。しかし、それは逆に言えば、人によってオリジナルの墨色を作ることができるという素晴らしい素材とも

も言える。墨の粒子は二五〜七〇〇ナノメートルと大変小さく、硯の上で二粒二粒ゆつくりほぐしていくような感覚で擦るといい墨色が得られる。

膠は牛、鹿などから抽出し、和膠と洋膠がある。和膠は三年ほど前に商業ベースでは生産中止となつてしまった。そこで東京芸大を中心に日本画用などの膠を維持していくために「膠文化研究会」が結成された。墨メーカーはそれぞれ和膠調達の道を探っている。

●淡墨の魅力

一般的な濃度の墨ではよくわからないが、墨色は薄い「淡墨」にすると、茶・赤・青・緑・紫など、色の具合がよく分かり、新たな表現を切り拓くことができる。

最近開催された書の展覧会では、江戸初期の近衛信尹・本阿弥光悦・烏丸光弘の書に注目する淡墨表現が見られた。また、奈良古梅園の七代当主松井元集が書き記した『墨記』に、江戸初期の文化人の松花堂昭乗の「淡描墨」という記述がある。また、江戸中期の儒学者・書家・篆刻家の細井廣澤の書に関する著述『観鷲百譚』(かんがひやくたん)には、「当世は奇をてらう人々が淡墨表現をする」と嘆いている一節がある。

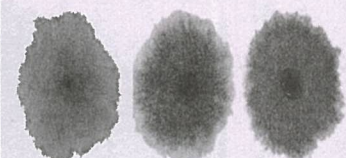
淡墨による書表現の変遷は今後の研究課題だが、奈良・平安の古筆や古写経は殆どが濃い墨(薄くない)で書かれ、中世後期から江戸時代前期に書表現として淡墨が意識され、江戸前期に花開いた。江戸の中後期以降、淡墨はすたれていき、明治期や戦前まで「淡墨」表現は影を潜めていたが、戦後、手島右卿、鈴木翠軒等の書家が宣紙(本画仙)を使い、淡墨や滲みの大きな作品で再び息を吹き返したのではない

かと思われる。時代時代による濃墨・淡墨の表現の変化は当然あるとしても、私達日本人の根底には「薄い」「薄い」などの美意識が存在しているのではないかと日野さんは想像している。この淡墨の美を引き出すのが、和紙である。

●墨色に多様性がある和紙
書家が秘技としていた淡墨の墨使いを一般の人が楽しむには難しきがある。そこで日野さんは画仙類で様々な項目、水の硬度、ペーパー、墨(唐墨)、時間(経年と経時変化)、紙の年代と配合、古墨化などで墨色の変化を調査し始めた。

和紙では変化の大きい硬度の違いを選び、全国の紙漉き工房や墨メーカーに協力を頂きながら、墨滴を落したり、文字や図形を描いて、実験・観察を繰り返した。紙は手漉き和紙を使用したが、調査で出た滲みの形・外辺・層・濃淡は画仙類より和紙の方が多様で、変化に富むことが分かった。今回実演に使った

▲会場ではエヴィアンと水道水で墨をすり、様々な和紙で実験する様子が再現された。右端は実験の説明をする日野楠雄氏

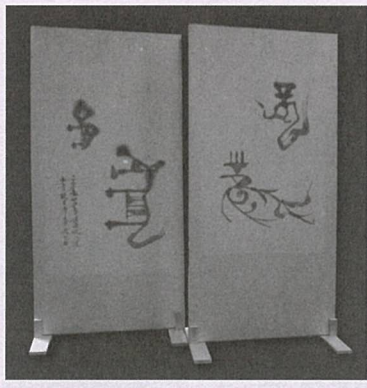


水の硬度で多様な墨の表情を見せる和紙
紙:石州(川平氏)楮100%、
墨:蒼苔(古梅園製)、
水:左-コントレックス(硬度-551)
中-エヴィアン(291)
右-森の水だより(28)





3300年前の甲骨文字「純」を描いた日野氏の書作品。(個人蔵)
紙:土佐 ロギーール・アウテンボーガルト氏 楮100%
墨:蒼畑(南松園製) 水:コントレックス



東西南北を守る(龍鳳虎亀)の作品
象形文字の作品

紙は魅力的な効果を出すために敢えて、叩解・洗浄・晒しの工程を通常より多くしてもらった紙もある。紙と墨と水の相性が生み出す墨色と形の意外な美しさを、日野さんは自作品にして昨年八月に「秘められた手漉き和紙の魅力ーピュアなフォトグラフ&書の世界」と題して発表した。将来は素材、製法、漉き手などの項目を合わせ墨色見本帳のようなものを作って、主要和紙専門店や書道用品店に置けば、ユーザーはその墨色見本をみて決め、漉き手はそのレシピ通りに作ることができ、需要拡大に結びつくのではと考える。

その他にも、和紙が書の世界に入っていくには、サイズや値段の問題が大きく、日野さんは江戸すだれや江戸指物の職人と「半切」サイズが漉ける簀や桁を試作し、小川和紙の漉き手と書に向く和紙を開発するなど、既存の枠組みにとらわれな

い動きを開始して

レポート

第十七回越前千年紀ロマン講座
「岩野平三郎と近代日本画の巨匠たち」

越前和紙の歴史発掘、継承、研究などを行っている「越前和紙を愛する会」が定期的に開催している「千年紀ロマン講座」が、七月十二日、生涯学習センター今立分館越前市定友町で開催された。今回のテーマは近代日本画の巨匠たちを影で支えた紙職人、初代岩野平三郎(一八七八〜一九六〇)の足跡を通して、越前和紙の技と職人魂の原点を探ろうというもの。

講座第一部では、NHKの「日曜美術館」で放映された「横山大観を支えた匠たち」のDVDを視聴。第二部では、石川満夫氏(石川製紙会長)の司会の元、三代目平三郎氏(現岩野製紙所社長)、寝食を共にして初代平三郎の大学ノートにピッシリ書きとめた手記と岩野家所蔵の書簡集を元に「紙漉き平三郎手記」を編集した河野徳吉氏(東京国立博物館客員研究員・紙の博物館評議員)の対談が行われた。



司会の石川満夫氏 パネリストの三代目岩野平三郎氏、河野徳吉氏

職人平三郎と画家たちの紙

明治期、西洋画の影響の元、日本画家たちは旧来の技法や様式だけにとらわれず、日本独自の絵画・水墨画を確立させようと模索して



「紙漉平三郎手記」

いた。この様な画壇の潮流に応え、平三郎は最初「面奉書」というコンセプトで、奉書を絵に向くように改良を重ねていた。大正十年、京都の画家、富田溪仙と平三郎の出会いを機に、新しい日本画用紙が誕生する。溪仙は、「紙本はごまかしのできない点では武道の潔さがある。中国紙や絹は寿命が二〜三〇〇年、日本紙は無敵」と評し、大瀧紙を愛用した竹内栖鳳は「絹はすなおなものだが、紙には気骨がある。筆触濃淡などは紙に限る」と紙本転換期の空気を伝えている。

大正二五年、古代の麻紙を、地元の教師牧野信之介を通じ、京都帝国大学の内藤湖南博士の勧めに従って研究、日本画用紙として復元したのが、平三郎の名をとりわけ有名にした「雲肌麻紙」である。三代目平三郎さんは、「麻は処理の仕方が難しいが、じいさんは楮、雁皮、三椏の繊維の調整と強度のある麻の混合の妙により、麻紙を編み出した。楮の墨付きは丸みを帯びているが、麻は直線的で、絵の具の吸い込みが芯のところで変わる性質をうまく活かした。小杉放菴さんがこよなく愛した「放菴麻紙」などは、殆どが麻で、楮がつかないようになってい

うな紙でした」と語る。大正二五年、横山大観は、早稲田大学図書館壁画の注文を受け、継ぎ目のない十五尺の巨大な和紙が漉けるかどうか、平三郎に打診。大作「生々流転」を最終的に紙本にできなかったことを無念に思っていた大観からのこの要請に、

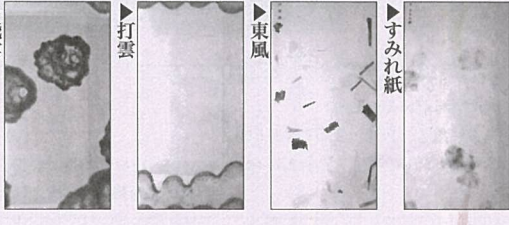
平三郎は約一ヶ月で、当時世界最大と言われた三間四方(5.4m×5.4m)の大紙を完成。漉き上げたられた楮四分、雁皮三分、麻三分、目方三貫(11.25kg)の紙に、大観は「全く不可能と

思っていたので、できたと分かった喜びの極みである」と書簡を送り、下村観山との共作で大作「明暗」をわずか数日で描き上げた。この紙は「岡大紙」と命名され、完成式典に招かれ絶賛された平三郎は、その時の心持ちを「口を極めてその労をたたえられ、夢かと思うくらいでした」と記している。三代目平三郎さんは「大勢が横一列に並ぶ溜め漉きの方法は、田植え前の畦からヒントを得たようだった」と初代の秘話を明かす。

画家の厳しい要求、緊密な交流から生まれた平三郎の紙は、絹に描く絹本(けんぼん)の流れを紙本(しほん)に変え、日本画用紙、越前和紙の名を美術界に深く浸透させることとなる。彼の紙を愛用した画壇の重鎮たちは、橋本雅邦、竹内栖鳳、横山大観、山元春挙、川合玉堂、下村観山、小杉放菴、安田靉彦、川端龍子など、枚挙にいとまがない。

幅広い研究態度

平三郎は、又越前に古くから伝わる技や文献を熟知し、古典文学にも造詣が深かった。三代目平三郎さんが継承している福井県無形文化財の模様紙「打雲」「飛雲」「水玉」を、当時最高の匠、西野弥平次に師事する。現福田忠雄氏が受け継ぐ



「紙漉平三郎手記」には初代平三郎が漉いた模様紙が巻末に納められている。

「墨流し」の技法にも熟達していた。先人の技とそれを自由な発想で発展させた雲華紙、東風紙、宮城野紙、有馬紙、すみれ、野分け、などの彼の漉き模様紙は、後に「美術小間紙」と称する越前の新しい紙市場を創出するきっかけとなった。昭和初期には、既に百二十〜三十点の組合登録の模様が あったという。

河野氏は「平三郎が案出した模様紙は、発想も自由で豊かで、何か紙を染しむゆとりがあり、平安貴族の付け文や歌のやりとりなど、我が国の紙の文化に繋がる優雅さと夢があった」と語る。「彼は記録も実によく取る人でした。大観さんとの話でも、先の洋行では、いい紙があったか、どのように紙は使われていたか、どういふ人達が紙を使っているのかなどを質問し、いわば市場調査をしているわけです」

「私が紙の歴史を調べていたときも、三田村文書を読めと、三田村家の蔵から古文書を出してきてくれた。古いことをよく知っている方で、鯖江へ行ってこい、福井に行つてこい、京都の二条家にこういうものがある、と教えてくれる。いつどこで勉強するか分かりませんが、『源氏物語』の紙にも詳しく、『宇津保物語』などもそらんじているほどだった。古典を読んで技術を磨いていたわけですね。芸術家の心情も合わせ持ち、俳句も『茂山』という号を持っていた」

平三郎は、昔の人が伝えてくれた技にもう一度工夫と磨きをかけ、精魂傾けて紙が漉けるよう、毎日大瀧神社に祈っていたという。

● 公人、平三郎

一九三三年、平三郎は問屋と漉き屋の主従関係をなくそうと越前製紙工業組合(現福井県

和紙工業協同組合)創設に尽力。漉き屋が問屋に支配されることなく自立するには、自らの力で原料を精選して調達する力を持たねばいけないと訴え、業界のために強力なリーダーシップを発揮した。又、明治期の廃仏毀釈で格下げになってしまっていた大瀧稚児神社を、三田村文書、大瀧文書の重要性を説くことで、国の重要文化財「大瀧神社」への格上げを牽引した。昭和の大恐慌の時には、組合の力をうまく使い、末端の客にも流通にも同じ値段で紙を売った。結果、問屋は負けてはならじと頑張つて紙を売った。

「要は、末端の客に忠実であれと言うことです。末端の欲しい人と、こちらが生活ができる程度の売り買いがあればよい。米の値段は乱高下しても、紙の値段は常に一定の値段で提供したいと思つていたようで、組合にも大所高所の戦術が必要だと言つていた。剛毅でありながら、戦略家の面も持つていた。」と河野氏。



司会の石川氏は最後に「岩野平三郎だけが突出しているのではなく、越前和紙の職人の根底には彼と同じ気質が流れている。あなたが本当に欲しいものだったら、一緒に本物を作つてみませんかという職人魂を持つているのが越前。それが越前和紙の幅を広くし、多種多様な紙を生み出してきた。作る側も平三郎の魂を通して越前和紙の原点を問い直して欲しい。」と締めくくつた。

情報欄

● イベント情報

■ 越前和紙伝統工芸士認定試験

時:2013年10月4日(金)
場所:福井県和紙工業協同組合(越前市新在家町)/受験者工場

■ 第30回伝統的工芸品月間国民会議全国大会関連行事(和歌山大会)

時:2013年11月1日(金)~4日(月・祝日)
場所:和歌山市市民会館・旧海南市立第一中学校
※会期中、ふれあい広場では、全国の伝統工芸士等の手ほどきにより、工芸品の製作体験・実演。越前和紙からは、福田忠雄さん指導で墨流し体験あり。

■ 第21回和紙文化講演会「作画に用いられる様々な和紙--個展から現代まで--」絵画用紙の諸相、紙と表現の変遷、文化財修復など

時:2013年11月30日(土) 10:00~17:00
場所:東京芸術大学美術学部第一講義室(東京都台東区上野公園12-8)
参加料:3,500円<機関誌『和紙文化研究』21号(1,500円)を含む>
申込:先着100名まで。
参加費を11月15日(金)までに、下記口座に振り込む。
振込先口座00170-8-402506 和紙文化講演会
詳細:和紙文化研究会まで <http://washiken.sakura.ne.jp/>

編集後記

高知のロギールさんを訪ねて榎原に何ったときは、下界は暑かったが、さすが「かみこや」さんの周辺は涼しい風が吹き渡り、一息つくことができた。その2週間後、四万十は過去最高の41.0度を記録した。温暖化が加速しているのか?かみこやではどうだったのだろうか?(よ)

■ 「うつつ和紙・棚井文雄写真展-越前和紙の世界」展-ニューヨーク展

時:2013年10月2日(水)~22日(火) 9:00~16:00
場所:ニューヨーク日本国総領事館
299 Park Avenue, 18th Floor NYC
詳細:<http://www.ny.us.emb-japan.go.jp>

■ トークショー/フィルム上映/レセプション

時:2013年10月2日(水) 18:00~20:00
場所:JaNet



※昨年夏に越前和紙の里で開催した「うつつ和紙」展が、今年6月の東京・南青山での展示を経てニューヨークでも展示されます。ニューヨーク在住写真家・棚井文雄氏の和紙プリント作品は、福井県「越前和紙の里」を撮影した「SPIRIT of PAPYRUS」、文化庁芸術家研修員として福井県全土で撮影した「私の好きな場所」シリーズなど。越前和紙の代表的な職人、人間国宝 第9代目 岩野市兵衛氏、福井県指定無形文化財 第3代目 岩野平三郎氏、福田忠雄氏、信洋舎製紙所5代目 西野正洋氏らの姿が捉えられています。また、会場内には、奉書や打雲など、代表的な越前和紙を職人とともに紹介。長い伝統に裏打ちされた美しい和紙は、ひとつの「作品」として鑑賞することも可能です。

季刊「和紙だより」第40号(2013年秋号) 発行日:2013年10月10日 和紙だよりURL→<http://washidayori.jimdo.com/>

発行人:福井県和紙工業協同組合 石川浩 〒915-0234 福井県越前市大瀧町11-11 TEL: 0778-43-0875 FAX: 0778-43-1142

編集所:Office YOMOSA 〒606-8225 京都市左京区田中門前町90 TEL: 075-712-8834 FAX: 075-702-6223 E-mail: m-yomosa@smail.plala.or.jp

編集人:右衛門佐美佐子・田中裕子

※無断での転写・転載はお断りします。